



さて、家に帰った俺たちは、ちょっと日焼けしてヒリヒリする体をシャワーで冷やして、それから例によってベランダで夜風にあたりながらくつろいでいた。

「うーん、不思議だ。2回チェックしたけど、おかしいところは見当たらないな」

ジョージが例の小箱を手に、そうつぶやく。

「例のバグか？」

「いや、だからバグと決まったわけじゃ……。アルゴリズムチェッカーの結果だと、特に問題になるような処理はないんだよね。そもそも単純なバグなら、全員に現象が出ていいはずなんだけど」

「たしかにな。俺たち3人にだけってのも不思議だけど。何か共通点でも……」

「共通点か……。そう言えば、3人とも同じDIユニット使ってたよね」

「ああ、……ってことは、そっちのバグか？」

「いや、バグとは……」

きつとこれは親父お手製のDIユニットのバグに違いない。そうでなければ、説明がつかないだろう。

「親父い、ちょっといいかな」

「なんだ、今はビールがまわって、いい感じなんだが。急ぎか？」

「大急ぎだ！」

親父はリビングのソファから立ち上がって、グラスを片手にベランダに出てくる。

「親父、バグだ」

「ん？バグ？」

「あ、バグと決まった訳じゃないんですが、今日、ちょっと変なことがあります」

「変なこと？」

「ああ。今日、ジョージが情報共有モードで夜空に星図を出してくれたんだけど、俺と沙依、それから美月の3人だけ、変な星というか、光点が表示されたんだ。3人だけってのは、親父

ご謹製のD Iユニットが何かやらかしてくれたんじゃないかと思うんだけどな」

「おいおい、そんなはずは。お前ら2人のはともかく、美月ちゃんのは、もうずいぶん前に作って渡したものだし、ソフトは特に手を加えていないからな」

「もともとバグってて、たまたま今日、その条件が合って3人とも現象が出たんじゃないのか？」

「うーむ、ソフトウェアは3重にチェックをかけてるし、昨日の夜、沙依のを作った時にもフルの動作チェックをしてるから、そんなはずは」

「それじゃ、3人だけって説明がつかないんだが」

「たしかにな。ちよっと待てよ・・・」

そう言うとき親父は家の中に入って行き、なにやら持って戻ってきた。見た目はリストバンドのようなものである。

「ジョージ君、それ、もう一度やってみてくれるかな。その星図ってのに興味があるんだが」

「それは？」

「俺のD Iユニットだよ。基本的なソフトは同じだから、バグなら同じ現象が出るはずだからな」

「わかりました。それじゃ、やってみますね」

「あ、ちよっとまった。母さん、手が空いてたら来ないか。ジョージ君が面白い物を見せてくれるって言うから、一緒に見ないか。D Iユニット持ってこっちに来るといい」

「なんですか？面白い物って。あなたがそう言う物で、これまでロクなものが無かった気がするんだけど」

「それはジョージ君に失礼だろう。ちなみに、母さんのD Iも同じだから、出るとしたら3人一緒に同じ現象が出るはずだ」

「なんですか。なにやら嫌な予感がするんですけど」

親父の奴、ちやつかりと夜空の星図を鑑賞するつもりだ。たぶん、その後、ジョージは夜遅くまで質問攻めに遭うに違いない。

「それじゃ、情報共有モードに。いきますよ」

ジョージがそう言うと、また夜空の星に重ねて星座が表示される。

「すごいな、これ」

「ほんと、綺麗ね。お父さんも、たまにはこういうロマンチックな事してくれれば、いいんだけどね」

お袋がまた余計なことを言う。これで、完全に親父に火が付いたはずだ。たぶん、今夜ジョージは寝かせてもらえないだろうな。

「でも、これって、お父さん覚えてない？」

「ん？何をだ？」

「ほら、学生の頃、コペルニクスで」

「あ、あのシャトルで彼女が、えっと・・・」

「サラ、サラ・ホイットニーだったわよね、彼女がやってくれたのに似てない？」

「そうだな。思い出した。そうそう、あの後が大変だったんだけど」

「本当に大変だったわよ。あの時はお父さんの日頃の行いを恨んだものよ」

「おいおい」

「他にもこういうことをやった人が？」

「ああ、もう昔の話だけどな。俺と母さんが、初めてコペルニクスに旅行した時の話だ。そうそう、アンリにも、その時初めて会ったんだが、ちょうどお前たちみたいなアカデミーの学生グループと、たまたま一緒になってな。その中の1人が、ジョージ君みたいな感じで色々やってくれたんだ」

「コペルニクス？また贅沢な・・・。でも、まてよ・・・どこかで似たような話を聞いた覚えがあるな。そう言えば、美月の親父さんがお袋さんにプロポーズしたとか・・・」

「そうそう。あれはなかなか感動的だったわ。一生君を守るよって」

「あはは、結果、奴は奴隷に身を落としてしまったわけだが」

「でも、あの時、体を張って私たちを助けてくれたデイブは、ちよつと残念だったわよね。

彼もいい人なんだけど」

そういえば、デイブが最初にあつた時にそんなことを言っていた。あまり思い出したくない話なのだが。

「え、それじゃ、デイブってのは、デイビッド・ムラカミさんのこと？」

「そうだよ。知ってるのか？」

「知ってるも何も、あのシャトル事故の時に救助してくれた船の副長さんだよ」

「なんだって？美月ちゃんといい、いったいどういう縁だろうな、これは」

「本当に不思議ね。じゃ、フランクとかも知ってるんじゃない？」

「僕たちの教官ですね。フランク先生は。そう言えば、デイブさんとは同級だったっておっしゃってましたよ」

「しばらく遠くへ行ってると聞いてただけど、戻ってきたのね。アカデミーの教官か。女生徒が放っておかないわね、きっと」

「ああ、もう大変だよ」

「二枚目だったからな。たしか彼はサラと付き合ってるんだっけ？」

「なんか、いい雰囲気だったけど、どうなのかしらね」

「サラさんって、その人は知らないな」

「おっと、余計なことを言ってしまったかな」

フランク先生に彼女が・・・いや、これは聞かなかったことにしておこう。ケイあたりに知れると、あっという間に学校中に広まりそうだからな。

「それはそうと、何か変わったことは？」

ジョージが聞く。

「あ、そうだった。昔話してる場合じゃないな」

「んーっと。見た限りでは、変わったところはないみたいだな」

「たしか、あの時は美月の回線で宇宙局のデータベースにアクセスしてた時だったからね。今は接続がないからちよつと環境が違うんだけど」

「こちら側での問題なら、それはあまり関係ないだろうね。その情報が向こう側から送られてきているんだったら環境を同じにしないといけないだろうが」

「やってみますか。美月がいないので、ちよつと面倒ですけど、例のプロジェクトのアカウントを使えば接続できると思うので」

ジョージはそう言うと、しばらくアウトバンドのパネルで何か操作をしていた。

「これで繋がったけど、どう？」

「うーん、特に変化は・・・。待てよ、出た。さっきよりもはっきりしてる感じだ」

「どれだ。こっちは変化がないが」

「ねえ、何の話？」

「母さん、何か明るい星が増えて見えたりしてない？」

「特に何も変わらないわよ。ケンジは見えるの？」

「今度は俺だけ？D Iのせいでもない？」

「不思議だな。ちよっとデータのトレースをとっておくね。あとでじっくり調べて見よう」

「それじゃ、D Iの側もあったほうがいいな。ケンジのはデフォルトでトレースがとれるようになってるから、ケンジに言ってお出してもらおうといい。なんなら解析も手伝おう。バグと疑われたからには、疑いも晴らしたいからな」

親父がそう言う魂胆はもう見えている。ついでに、星図のしくみをパクるつもりに違いない。

「そうしてもらえると助かります」

「よし、それじゃ準備をするからな。ちよっと待っていてくれ」

「あなた、ほどほどにね」

「わかってるって」

そんな感じで、親父とジョージは、親父の自称ラボ兼自室に入り、俺はとりあえず先に寝ることにした。たぶん、二人は徹夜だろう。どうせ明日は夕方までは暇だ。昼間は寝ていても問題は無い。まあ、俺はそんな問題よりも睡眠時間を優先したいから、後はジョージにまかせよう。たぶん、明日には結論を出してくれるだろう。そんなことを考えている間に、俺は眠りに落ちていた。



その頃、美月の実家では、女子たちがガールズトークの真っ最中。中世日本の旧家を模したという広い和室に5人が床を並べ、布団の上で今夜も恋愛談義に盛り上がっている。

「まあ、あれだ。アカデミー附属高男子のレベルは、残念ながらあまり高くないのが現実だよね。格好いい宇宙船乗りの卵なんて夢は、入学初日に軽く打ち砕かれちゃったし」

「えー、そうなんですか？なんか、一般人のイメージとだいぶ違いますね。同級生なんか、女子も男子も、すごい夢見てますけど。私なんか、お兄ちゃんの話とか、しょっちゅう聞かれますよ」

「夢なんて見てるうちが楽しいのよ。現実はその甘くないわ。私なんか入学前から打ち砕かれてるわよ」

「え、それって、もしかして……」

「あはは、美月の入学前、私の初日の共通項と言えば一人だけどね」

「そんなぁ……」

「でも、私も最初にお話しした同級生はケンジ君でしたけど、好印象でしたよ」

「え、入学式当日から罰当番だったの？」

「そういえば、なんだか二人で仲良くやってたわよね。薄暗いところで」

「え、仲良くだなんて、そんなことありませんよ。普通にお話ししてただけです」

「それ見た美月の顔ったら、すごく怖かったけどねえ」

「そ、それは、単にあいつがサボってるのに腹がたっただけで、他に意味は無いわ」

「ふーん、でもさ、発言には明らかにジェラシーを感じたよ」

「だから、違うってのよ。どうして私がケンジなんか」

「あのー……」

「あ、悪い悪い。別に沙依ちゃんのお兄ちゃんをけなすつもりは無いんだよ。ケンジはそれでも、ずいぶんマシなほうだと思うし」

「そうそう。私もケンジ君は大好きですよ」

「ほお……、大好き……と？」

「え、え、そう言う意味じゃなくってですね……」

ケイの意地悪い突っ込みと、美月のちよつと殺気だった視線にマリナが真っ赤になって言い訳をする。

「でも、ちよつと安心です。お兄ちゃん、どちらかと言えば地味な性格だから、友達できるかどうか両親共々心配してたんですよえ」

「地味な性格だから、このチームのリーダーが勤まると分析」

「うん。まあ、自分で言うのもアレだけどさあ。このメンツ相手にケンジはよくやっていると  
思うよ」

「本当に自分でよく言うわね。私も否定はしないけど」

「そうですよ。いつも土壇場でケンジ君がうまく全員をまとめてくれるから、本当に心強い  
です」

「そうそう。つまり、男って奴はさ、見かけも重要だけど、中身で勝負ってことだね」

「はあ、なんか微妙な感じがしますが、でも、必要とされてるのは妹としても嬉しいですよ。  
ところで、なんとなく話がずれちゃいましたね。それでも、男子はともかく、女子のレベルは  
めっちゃくちや高くないですか？」

「そうかなあ。まあ、そう言ってもらえると嬉しいけどね」

「つまり、うちの女子はともかく、男子は夢見ててもいいってことですよね」

「見かけはさておき、性格はどうかしらね」

「あはは、そうだね。たしかに」

ケイが意地悪い表情で美月を見て言う。

「あんた、何が言いたいわけ？」

「別に。それとも、何か心当たりが？」

「どうでもいいわ。ばかばかしい」

美月も少しケイとの間合いを学習しているのかもしれない。最近はずつ込み一方でなく、逃げることも覚えたみたいだ。でも、そこで手を緩めるケイではない。

「どころでさ」

「何よ？」

「今朝はどうしたのさ、美月。なんか、あからさまにおかしかったじゃない」

「もう忘れたわ。どうでもいいじゃない、そんなこと」

「よくない。チームの要のパイロットがなんか悩んでそうだと気になるよね」

「食事の後、急に元に戻ったのも不自然」

「そうですね。男子がいると言いくいことでも、今なら大丈夫ですよ」

「なんでいきなり全員、私の話に食いつくわけ？」

「皆さん、心配なんじゃないですか？やっぱり」

マリナが本当に心配そうに言うので、流石の美月もちょっと言葉に詰まってしまう。メンタル面のケアもメディカルの重要な仕事ではあるのだが、それ以上にマリナの場合は、本当に心配していそうだ。美月もそこはわかっているのだから、突っぱねられなかったのだろう。

「そんな、心配なんて・・・。ほら、誰でもあるじゃない。ちょっと嫌な夢見てブルーになることなんて。そういう話よ」

「あ、やっぱり凶星だったのね。子供じゃないわ、みたいな事言って、実は」

「う、うるさいわね。あんたの言い方にムカついただけよ」

「もう、素直じゃないんだから、美月ってば。でも、そう言えば、ケンジも変な夢見たとか言っけなかったっけ？」

「そうですね。天の川に流されたとか」

「まさか同じ夢見た？」

「・・・」

「凶星か。たしか、静止軌道から地球へのフライトの時もそんなこと言ってなかったっけ？」

「……」

「でも、二人が同じ夢見るなんて事、あるんでしょうか。心理学的には、同じようなトラウマがあるとかかもしれませんが、うまく説明できませんし」

「例の事故体験が影響してる……とか？」

「見たのが事故の夢なら、そう推定できる。でも、そうじゃないなら関連性は薄い」

「あのね、どうして同じ夢って決めつけてるわけ。私はまだ何も言っていないわよね」

「違うの？」

「……」

「ほら、やっぱり凶星じゃないのさ」

「……、同じってのはちよつと違うのよ。場面は同じだけど、それぞれ違う役を演じてるみたいなの」

「そんなことあるの？」

「同じ仮想現実の中に二人が入ったとも考えられる。でも、それを誰が作ったのか、また、そうする理由が何かかわからないから、単なる仮定に過ぎない」

「しかも、睡眠中にだよね」

「たしかに、レム睡眠の最中なら考えられないことではありませんが、サムの言うとおりに、どうしてそれが起きたのか、理由がわかりませんね」

「ケンジは、川に流されている時、対岸に美月がいたって言ってたよね。じゃ、美月はケンジが流されていく夢を見ていたってこと？」

「そうよ。流石に見ていられないから、手を引っ張ろうとしたんだけど、届かなかった。あいつ何かを叫んでたけど、それも聞き取れなくて」

「そう言えば、ケンジ君、上流から大きな星が、とか言ってませんでしたか？」

「言ってた言ってた。美月はそれには気づかなかったの？」

「それは知らないわ。ケンジに手が届かなくて、そこで夢が終わったのよ。ケンジなんか、って思ったけど、なんだか後味が悪かったわ」

「わかりますよ。私ももしそんな夢を見たら、ちよつと考えてしまいそうですから」

「なんか不思議ですよ。誰かがお兄ちゃんと美月さんに何かを伝えたがってるんでしょうか」

「うん。でも、その誰かが誰で、どこにいて、何のためにそんな夢を見せたかが謎だよな」

「星と言えば、さっきのあれ。やっぱり、美月さんとお兄ちゃんでしたよね。私も入ってましたけど」

「そう言えば、あれも何か関連してるのかな。沙依ちゃん、その星ってどのへんに見えたの？」

「そうですね、ちよつとデネブとベガの間くらいの大三角の脇のあたりでしたね。大三角の  
一辺のちよつと内側あたりでした」



「ということは、ベガとアルタイル、つまり牽牛、織女の少し上流ですね。なんだかこの話、繋がってないですか？」

「その星に何か意味があるのかも」

「そう考えるのが妥当」

「ということは、その情報はインターフェイスを介して3人だけに送られてきたという事だよね」

「でも、昨日、沙依は夢を見ませんでしたよ」

「そうだよね。昨日はなくて、今日はあった共通点がわかれば」

「そう言えば、今朝、お父さんから新しいD Iユニットをもらったんですよ。ほら、これ」

沙依はそう言うと左手首のD Iユニットを見せた。

「え、それ、どこかで・・・」

美月が自分のD Iユニットに目をやる。

「同じじゃない。どうして？」

「ほんとだ。見た目、まったく同じだね」

「あ、ごめんなさい。話すと長くなるんですけど、実はこれ同じ物なんです。お父さんがタベ徹夜で作ってくれたんですけど」

「どうして、美月さんのD Iと同じ物を沙依ちゃんのもの、というかケンジ君のお父さんが？」

「そこが長い話なんです。私も昨日、お父さんから聞いたばかりなんですけど。実は、うちの両親、美月さんのご両親と知り合いだったそうなんです。なんでも、学生時代にコペルニクスで知り合ったとかで」

「こ、コペルニクス？それじゃ、パパの知り合いの電子工学の専門家って、沙依ちゃんのもの、ケンジのお父さん？嘘でしょ、まさかそんなことって・・・」

「おおお、なんだか因縁めいた話になってきたじゃないのさ」

「茶化さないですよ。それで、沙依ちゃんのお父さんはどうしてうちのパパにこれを？」

「詳しいことはわからないんですけど、13歳の誕生日のプレゼント用に、情報処理能力を大幅に上げたものを作ったとか言っていました。それが、例の事故の時に壊れたので、バージョンアップして作り直したらいいんです。で、昨日、お兄ちゃんも同じ物をお父さんからもらってるんです。誕生日に渡せなかったプレゼントだって。お兄ちゃんは、美月さんと同じだからってちょっと恥ずかしかってましたけど、ついでに沙依もおねだりしたら、お父さん、徹夜で作ってくれました。ということ、今は3人お揃いなんです」

美月は、なにやら最悪・・・というような顔をして黙り込む。

「おお、それじゃ、美月とケンジもお揃いなんだ。うーん、ついでに私たち全員の分作ってくれないかな、沙依ちゃんのお父さん」

「パーツがあれば作れると思うんですけど、ちょっと聞いてみましょうか？」

「そ、それがいいかもしれないわね。私とケンジだけお揃いなんて、いくらなんでも我慢ができないわ」

「あ、沙依もお揃いですよ。最初、お父さん沙依のは渋ってたんですけど、お兄ちゃんが説得してくれて」

「ケンジにしては、賢明な判断じゃない。本当に二人だけお揃いだったら、これはお返しするわよ」

「またまた、そういうのをテレ隠しというのだよ。本当は嬉しくせにさ」

「お揃いなんて羨ましいです」

「ほお、羨ましい・・・と？」

「あ、あ、それは、その・・・」

マリナはまた真つ赤になって言い訳しようとするが、どうも今夜はこういう失言が多い。もしかしたら、お泊まりの夜のガールズトーク特有の雰囲気がそうさせているのかもしれない。

「まあ、あれだ。ケンジと美月、沙依ちゃんだけってのは不公平だから、やっぱり全員のを作ってくれるようにお願いしてみよう」

「でも、ご迷惑になるんじゃない？」

「大丈夫です。自分が作ったものを皆さんが欲しがっていると聞けば、気合いを入れて作ってくれると思いますよ」

「それでも、費用くらいはお支払いしないとけませんね」

「そうだね。いくらなんでもタダって訳にはいかないし、費用を払うか、何かお礼をしないといけないよね」

「費用なら全部私が出してもいいわ。ケンジとお揃いのブレスレットをクラスで冷やかされるくらいなら安いものよ」

「お、太っ腹！。よし、じゃそういうことで。沙依ちゃん、よろしく」

「了解しました。明日家に帰ったときに話してみます」

「で、ごめん。この話はしばらくケンジとジョージには内緒で」

「わかりました。まかせてください。ところで、あれって、それじゃDIユニットのせいっ

てことなんですか？そう言えば、お父さんが何か特別な機能があるとか言ってたような気がするんだけど」

「特別な機能？」

「沙依にはよくわからないけど、ジョージさんとお父さんが、そんな話をしてました。お兄ちゃんは実験台にされたって怒ってましたけど」

「なんだろうね。サム、何かわかる？」

「情報が少ないので無理。でも、そのユニットを見ればわかるかも知れない」

「よし、沙依ちゃん、ちよつとサムに見てもらおう」

「サムさんって、こういうの詳しいんですか？」

「そりゃ、我がチームが誇るC&Iだからね。時々、ジョージの上前はねてるし」

「それじゃ、お願いします。沙依もちよつと気になりますから。セキュリティは外しておきますから、じっくり調べてください」

そう言いながら、沙依はプレスレットをはずすとサムに渡した。サムはそれを受け取ると、なにやら操作して、そのあとしばらくアウトバンドのパネルをのぞき込んでいた。

「これは興味深い。市販されているユニットの10倍以上の処理能力、それに通信速度もずいぶん速い。これは私も欲しい」

「おお、サムも興味を持ったか。まあ、ケンジとおそろ、という話じゃ無くて技術的にって話みたいだけどね」

「ひとつ、機能が不明のモジュールがある。神経系と通信回線の間で何か特殊なデータ変換を行うモジュールのようだけど、これまで見たことがない。それに・・・」

「それに？」

「インターフェイスポイント側が通常の仕様外の信号経路になっている。これでは、神経回路と接続ができないから、何の役にもたたないはず」

「もしかして、失敗作？」

「でも、もし、これに対応出来るようなインターフェイスポイントを持っている人がいるとすれば、何か他の人にはできないことが出来るのかもしれない」

「もしかして、3人はそれを持っていると？」

「私の場合、残念だけど、その可能性もあるわね。だいたい、私のインターフェイスは、パの実験台みたいなものだから。でも、流石にケンジと沙依ちゃんは、ありえないわね」

「だとすると、その機能そのものは原因ではない・・・か。でも、それが他の機能に何かの影響を与えているってことはないのかな」

「バグ、ということならそれは考えにくい。用途はわからないけれど、プログラム自体は非

常によくデバッグされているように見える。たぶん、かなり綿密なテストをしていると思う」  
「役に立たない機能をそこまで綿密にテストするなんて、なにか陰謀めいたものを感じるわね」

「陰謀、とか言わないでくださいよ。うちのお父さん、たしかにかなりマニアックですけど、たぶん、陰謀とかにはまったく無縁な人なので」

「沙依ちゃんのお父さんじゃなくて、うちの両親の話よ。もしかして、パパがそれをお願いした・・・とか」

「自分の娘にそこまでやる？」

「あいつならわからないわ。そもそも、私がなんで疫病神扱いされなきゃいけないと思ってるのよ。全部あいつの、パパのせいなんだから」

「それなら、ケンジの親父さんが、そんなDIYユニットを作ったつても納得できるかもね」

「お父さんも、そういうところに興味を持つと、突っ走っちゃう人ですから、ありえない話じゃ無いと思います」

「このモジュール、実際にデータを処理した形跡がある。トレースが自動的に取られているから、これを見ればどんなデータがどこから送られてきたかわかるはず」

「でも、沙依ちゃんには、そのデータを受け取るインターフェイスがないわけでしょ。どうして、データが流れるわけ？」

「わからない。でも、確かにインターフェイス側と相互の通信が記録されている」

「それじゃ、沙依ちゃんは、その回路と繋がるインターフェイスを持つってことですか？」

「そういうことになる」

「ねえ、それじゃ美月はどうなの？」

「美月も調べて見る？」

「いいわよ。何がなんだかはつきりさせないと気味が悪いわ。これも調べてくれる？」

美月もブレスレットをはずすとサムにそれを渡す。

「これも、同じ。やっぱりデータが流れた記録がある。二人とも、なんらかのインターフェイスとの間で情報が交換されていたことが推定できる」

「それって、沙依ちゃんも私も同じようなインターフェイスを持つって言うこと？」

「そう考えるのが自然。おそらくケンジも同じ」

「私だけならわかるけど、どうして二人が？偶然とは考えられないわ」

「それと、今朝の明け方にもデータが流れた記録が残っている」

「それじゃ、美月とケンジが見た夢つても外部から来たと？」

「詳しいことは細部を見ないとわからないけど、かなりの量のデータが流れ込んでいるのは

間違いない」

「そのデータはどこから送られてきてるんでしょう」

「今夜のものはジョージのコンピュータを経由しているから、そちらの情報が無いと追跡は難しい。今朝のものは、一般回線じゃなくて、アカデミーの学生専用回線を経由している。でも、その先がどこかは、アカデミー側で調べないとわからない」

「アカデミー回線経由なら、ケンジに同じデータが流れてても不思議じゃないか。まあ、なんで二人？って謎は残るけど」

「そうなると、送信元がどこかになりますね。それと、誰が何の目的でというのも」

「でも、それは通信経路をたどらないと、知りようがないわね」

「学校に戻れば、調べる方法はある。でも、ここからでは無理」

「そっか。それじゃ、謎解きは帰ってからだね」

「そうね。でも、一つ疑問が残るわ。静止軌道からのシャトルで見た夢。あの時、ケンジは前のDIユニットを使ってたはずじゃない。このユニットがパズルのピースだとしたら、あの時は違ったわよね」

「確かにそうですね。お兄ちゃんもこれをもたらしたのは昨日ですから」

「不思議ですね。気になります」

「とりあえず、ここじゃ、これ以上の謎解きは無理そうだし、明日、ジョージとかケンジとも話して、帰ってから一緒に謎解きしたらいいんじゃないかな」

「それには同意。情報は多い方がいい」

「しかたがないわね。ケンジに話すのはちよつと気が進まないけど」

「まあ、どうせジョージのほうもあれこれ調べてるだろうから、もしかしたら同じような結論になってるかもね」

「そうですね。これはチームの問題でもありますし、みんなで解決しましょう」

「あのー、もし原因がわかったら沙依にも教えてください。私も気になります」

「わかったわ。原因がつかめたら連絡するわ」

「ありがとうございます」

「さて、この話はとりあえずおいといて、沙依ちゃんってさあ、彼氏とかいるの？」

「え？彼氏ですか？ えーと・・・」

「あなたも唐突ね。そんな無茶振りされても困るわよね」

「いますよ！・・・と言いたい所なんですけど、どうも同年代の男子たちは夢見がちなので、いまひとつ付き合いきれないというか」

「そっか。沙依ちゃんは、お兄ちゃん大好きみたいだから、年上でないとダメかもね」

「中学あたりの男子は、たしかにそうだったわね。まだまだ子供っぽい夢を本気で見てたりして、バカじゃないの、とか思ったものよ」

「たしかに、精神的には女子のほうが成熟が早いですからね」

「ま、そう言う意味では、ケンジもジョージもまだまだ大人になりきれていないか」

「そうね。でも、それをあなたに言われたら、あの二人もちよつと辛いんじゃないのかしらね」

「いやいや、私の大人っぽさは今日もしっかり見せつけておきましたので、大丈夫かと」

「水鉄砲持ってよく言うわね」

「それはお互い様でしょ」

「最初に持ち出したのは、そつちよね」

「いやいや、順番は関係ないと思うけど？」

そんな感じで、いつしか元の雰囲気に戻った5人は、夜更けまでガールズトークに花を咲かせたのである。